

奈良の施設園芸と

施肥の近代化 (完)

奈良県経済連

岡田卓穂

奈良県におけるいちごの施肥体系例 (ハウス半促成とCDU化成)

耕起畦作どき ————— 定植前 ————— (マルチ) ————— 第1花房開花期 (以後果房毎開花期から成熟まで)

苦土石灰 120kg
熔りん 30
(骨粉 60)
(全層施肥)

>

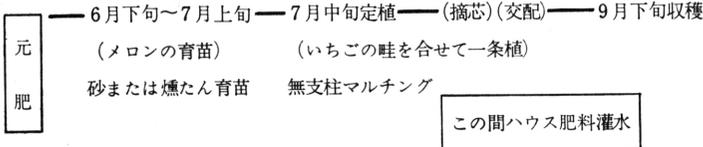
CDU磷加安
S604
50kg
(全層施肥)

>

くみあい液肥
400 ~ 500倍
または
大塚ハウス肥料
400 ~ 500倍
チューブ灌水

> (灌水回数多い場合は稀薄液を使用する)

3. マスクメロンをとり入れた経営近代化 夏休みは学校だけでなく、ハウス栽培でも休作す



加安(S604号, S555号)を10a, 60kg全層施肥し、あとはビニールマルチのチューブで灌水施肥する。

摘芯すれば1株から4条のツルを出し、無支柱で1ツル1個着果させ、10a2,400個は収穫できる。防除はタンソ、ポト、ベツ、ウド

るものがある。第2図にみるように、いちごハウスは7月から9月まであき屋となる。

シロ病のうち1, 2種に注意するだけで、極めて少肥省力で短期間に40~50万円の粗収入をあげることができる。

今や緩効性肥料の開発流通によって、如何なる栽培型においても、施肥期や施肥位置が合理的にできるようになり、急速に普及しつつある。

施設園芸の近代化、施肥の合理化から、今後は防除の近代化に向かうであろう、と筆者は考えている。



↑奈良のマスクメロン



奈良の電照いちご→